

蛇神様に嫁がされ、

種付けされて、産卵させられました

花室かんろ

注意書き

● この作品は成人向け作品です。十八歳未満の方の閲覧を固く禁じます

● ハート喘ぎ、濁点喘ぎなどを含みます

● 合意のない性行為の描写がありますので、苦手な方はご注意ください。現実でのそのような行為を推奨、肯定する意図はまったくございません

蛇神様に嫁がされ、種付けされて、産卵させられました

第一章 蛇神の住む家

春とは名ばかりでまだ寒さの残る四月、響子は輿こし入れした。

輿入れというのも名ばかり。要するに生け贄だ。

四方を完全に目隠しされた輿の中、響子の意識は、数時間前までいた故郷に戻る。

そこそこ大きな市の片隅の、小さな町。その中にある、小さな商店街。

住宅街に囲まれた立地にあり、八百屋、魚屋、個人経営の飲食店などの、住居兼店舗が並んでいた。東京に負けず劣らず賑わっている都市の中心部と打って変わって、下町という言葉がよく似合うあの町では、主な買い物先はその商店街だった。道向かいに大型の商業施設はあったが、

そちらは加工食品や衣料品などに力を入れていたので、上手く棲み分けはできていたように思う。

その商業施設が急に、事業拡大のために商店街に立ち退きを命じてきたのだ。

店主も、その家族も、こぞって抵抗した。しかし金と権力というわかりやすい力には敵わない。気づけば、あとは神頼みしかない状況まで追い詰められていた。

（そんなに、悪い話じゃなかったと思うんだけどな……）

響子は軽く首を振った。響子には、商店街を守ることへの固執をそこまで大事なものに思えなかった。そして、そんな自分が嫌だった。

（きつと、厄介払いもできるし一石二鳥、ってことで私が選ばれたんだ

ろうなあ……)

どうしようもなく溜め息が出る。

そうだ、自分は生け贄なのだ。

現実逃避じみた回想から一転、現在置かれている状況を再確認する。

自分は生け贄に選ばれて、それでこれから……。

これから、どうなるのだろうか？

若い娘が神様の生け贄になるとなればその末路は、食べられるか、慰みものになるかだと相場は決まっている。着替えなど、必要な荷物は用意させられたということは後者だろうか。命だけは助かるのだろうか。

響子は側のスクールバッグに視線をやる。

やめよう。こんな思考も「もし神様が本当にいるのなら」という妄想

で、先程までの回顧同様に現実逃避にしかならない。

今は、逃げなければ。

今や唯一の所持品になってしまった鞆の持ち手に手をかけ、響子は今度こそ本当に思考を現実に戻す。

昼過ぎに山に連れてこられてからどのくらい時間がたったのか、正確にはわからないが、まだ外は明るい。日が出ているうちでないと危険だ。そつと外を覗いて、見張りなどが付けられていなければ逃げ出そう。どこに向かうかは、その後決めればいい。

暗幕で裏打ちされたすだれの隙間から外の様子をうかがう。

響子は、自分が見知らぬ場所にいると気づいた。

輿から出て背側には大きな木の門があり、その戸はぴっちりと閉まっていた。扉の両脇からは漆喰の壁が続いており、それが囲む面積は横幅ゆうに五十メートルは超える。奥行きはわからない。果てが見えないのだ。

前方二十メートルほど先には大きなお屋敷。門から玄関まで一直線に、そこだけ舗装されて、道ができていた。

輿が動かされた感覚は無かったはず。

響子の思考はそこで止まり、今の状況にまともな説明づけができない。それでも、自分はあの屋敷に行かねばならないと、それだけはなぜか確信が持てた。

愛しい母校の鞆を体にびったりと密着させるように抱え、玄関まで向

かう。表札もインターホンも無い。許可なく立ち入るのは憚られて、その場で呼びかけた。

「ごめんください」

その声の震えに、響子自身驚いた。

先ほどまで気づかなかった心臓の音が、体を内側から揺らす。どうやら頭が思考放棄している間も、本能は仕事をしてくれているらしい。体の緊張が、脳にまでじわじわ広がってくる。もつと慎重に行動すべき異常事態に置かれているのだと、今更気づいた。

しかし時すでに遅く、奥からは足音がしていた。

引き戸を開けて出てきたのは、青年だった。響子よりも少し年上だろうか。

長い黒髪はゆるく結えられ、白い肌とコントラストをなしている。

形のよい眉、通った鼻梁、薄い唇。体型の分かりづらい着物だが、おそらくすらりとしたスタイルをしているのだろう。その人間離れた美貌以外は、普通の人間となんら変わりのない姿だった。

「お前が、生け贄か？」

「は、はい……」

すると男は呆れたような顔をした。

「神への供物には若い生娘贈つとけばええ思うたんじゃろ。安直な……」
ため息混じりの発言に、自分が歓迎されていないことを悟る。

「ごめんなさい。あの、私じゃ、お気に召さなかったってことですか……」

……？」

男は響子の顔を見て一瞬黙り込むと、今度は気の毒そうに眉を下げた。「なんじゃ、何も聞いとらんのか。まあええ。とりあえず上がり」

促されるままに玄關に入る。そうして通されたのは意外に現代的な部屋だった。おそらくリビング兼ダイニングで、ソファと食卓用の椅子との両方が置いてある。ソファの前にはローテーブル——冬にはこたつになるのだろう——もあったが響子は椅子に座らされた。

「眷属からの報告で事情はわかつちよる。地元に根付いて生きてきた商店街が地上げの危機にあった。お前らはわしに助けを期待しとる。大体こんな感じじゃな？」

席に着くなり男は話しだした。いろんな時代の、いろんな場所の言葉が混ざったような口調だ。まだ状況は飲み込めていないものの、響子は

頷く。

「はい。あの……、あなたは神様、なんですか？」

男も鷹揚に頷いた。

「この山で祀られとる蛇神じゃ。そしてお前はその生け贄」

最後の単語で響子の緊張が増した。

「だがな、別にわしが若い娘差し出せ言うたわけじゃない」

その言葉をどう受け止めればいいのか、分りかねた。

「わしはあの商店街がどうなろうと、開発が進もうとどうでもええんじや。ただ人間に捧げ物をされたらそれは神として答えないかん。ああ、捧げ物はお前のことじゃない。お前が来る前に、米やら野菜やら酒やらが奉納された」

蛇神はそこで言葉を切った。今まで無表情で事務的な説明をしていたのが、真剣にこちらを見つめてきたので、響子はいよいよ息が詰まった。何か、恐ろしいことを今から言われる気がする。

「人間に加護を与える神通力を使うためには、卵が必要なんじゃ」

「たまご……」

相槌代わりに、おうむ返ししかできない。

「そうじゃ。人間の女が産む卵」

蛇神の言葉を聞いて、響子の喉からひゅん、と妙な音が出た。

「お前は卵を産むための要員として送られてきた」

その続きは、彼は目を伏せながら言った。

「供物じゃなくて、まあ……、道具としてじゃな」

どうやって卵を孕み、産むのか。響子の頭はそれのみで占められた。大方予想はついているが、あまりにも恐ろしくて認められない。「そんな怖いことはしない」と言つて欲しいがためだけに確認したくなる。

「わ、私、卵産めないです」

「わしの精を胎で受ければ孕む」

やっぱり……。最悪の、しかし予想通りの返答が返ってきて響子は絶望した。だから経産婦の方が安全だとかなんとか言っているが、響子の耳には入らない。

蛇神はまた眉を下げ、憐れむような表情で続けた。

「さっきも言ったがわしはどうでもいい。もしお前がどうしても嫌で、地上げもどうでもええ言うんならこのまま帰すこともできる。商店街の

ことは諦めてもらわないかんが……」

「いえ、頑張りたいです！」

蛇神は目を見開いてこちらを見た。

自分の性格というか癖というか、流されやすさと気弱さのせいで、響子の絶望はより深まった。

この性格のせいで、いつも損をしてきた。今回も……。

「私は、商店街を救いたいです！」

「いや、だが……」

蛇神は何か言いたげだったが、一度口を閉じ、言い直した。
「そうか、それならよろしく頼む」

第二章 初めてのまぐわい

湯船につかっていると、緊張感も警戒心も薄れてしまう。

危機的状况も忘れ、昼間に案内された屋敷の見取り図など思い浮かべてしまう。

えっと、玄関入って右手が今いるお風呂で、左手が客間でしょ。まっすぐ行けばリビングで、そこを通り抜けたら廊下。目の前が蛇神様のお部屋で、右が私に貸してくださった部屋。さらに右には階段でその上には……。

響子の心臓がドクンと鳴った。のぼせているわけではない。

二階には、寝室があった。

今からそこで、抱かれるのだ。

心臓がうるさく、もう湯船につかってなどいられない。体を拭く時も、用意された寝巻きを着る時も、息は上がって体は震える。

「あの、お風呂、頂きました……」

恐れ多くも一番風呂を譲ってもらったので、次は蛇神の番だ。

「そうか、わしもすぐ行くけん待っとれ」

リビングを抜けて、右側に階段、左側には廊下が続いている。蛇神の話によると離れに続いているらしい。離れは祈祷のための空間なので入るなどとも言われた。

響子は二階に上がり、寝室に入る。ダブルベッドは情事を強く連想させる。その上で膝を抱え所在なく待っていると、やがて蛇神も上がって

きた。

「まあまずは、横になれ」

「よろしくお願いします」くらいは言ったほうが良いのだろうかと迷っているうちに、蛇神が先に口を開いた。響子はそれに従って仰向けになった。

覆い被さられて泣きそうになったのを見て、彼はどうしたものかと思案顔になった後、響子の頬を撫でた。

「お前の身体を貪ろういうわけじゃないんじや。初めてなのも分かっている。なるべく負担の無いようににはするけん、そう怖がるな」

正直そんな言葉でほぐれるような恐怖ではないが、とりあえずは返事

をする。

「はい……。んっ!？」

響子の言葉も聞き終えたのか分からないほどのタイミングで、唇が重ねられた。

すぐに舌が侵入し、上顎を丹念に舐められる。

「ふんッ!?ん、うん、ふ……。ッ」

くすぐったい感覚に、逃げ出したくなる。肩も腰も勝手にビクビク跳ねて、捻れて、この感覚をやり過ぎそうとする。

「はあっ……。!ぐっ」

息が苦しくなってきたあたりで解放されたが、いつの間にやら^{あわせ}裕から侵入してきていた手が、胸から腰にかけてゆっくりと撫でさすり始め

た。

蛇神が何も言わないのが、余計に恥ずかしい気もするし、返って助かった気分にもなる。一体相手はどんな表情をしているのかと、響子は固く閉じていた目を開く。

無表情に、しかしこちらの反応を一つたりとて見逃すまいとばかりに見つめる目と、ばっちり目が合ってしまった。

「いッ……!? うう、い……」

同時に胸の先端をきゅっと摘まれ、不思議な感覚が身体を走る。キスともまた違う快感で、さっきまではじわじわ、ふわふわした感覚だったのが一気に鋭く、深くなった気がする。

寝巻きを開かれて露わになったデコルテに舌が這わされた。生ぬるさ

とねっとり感の下へおりていく。

そしてついに、乳蕾に到達した。

「んや、……ああッ、ふ、くうん……。あッ、こし、こしがあ……。ッ！」

「腰がどうした？」

胸の悦楽もさることながら、どこよりも、腰がたまらなかった。触られてもいないはずの腰が、熱くて、疼いて、そして気がついたら、勝手にくねらせていた。

「わかんなくて、こし、へん……」

混乱と不安でいっぱいになる響子を見て、この先もできると判断したのか、それとも生け贄側の都合などお構いなしなのか、蛇神は響子の帯に手を伸ばした。

ショーツも脱がされ、生まれたままの姿で脚を広げさせられて、響子の口から「ひイツ……」と悲鳴に近い声上がる。

意外なことに、恐怖は長続きしなかった。蛇神が陰核に触れた瞬間、響子の意識のすべてはそちらに持っていかれた。

「あんツ！ ああツ！ ダメえっ……んっ、んツ……！」

先程までの快楽とは比べ物にならない。口から漏れる声も、何かが明らかに違っている。自分の口からこんな……甘く、媚びた声が出るのが恥ずかしく、響子は手で口をふさぐ。

「我慢せんでええ」

そう言うとき蛇神は響子の手を外させ、自分の指を咥えさせた。

「喘いだほうが身体もほぐれるじゃろ、多分」

蛇神の手のせいで口が閉じれない。その上、口内の指が舌に当たる。

（舐めたい……）

もうまともな思考もできない響子は欲に負け指を舐め始めたが、蛇神は咎めなかった。

「うう……♡えふ、んむっ、んう………んッ！んッ……♡♡」

舌先と陰核に与えられる快感に夢中になっていると、いきなり何か、大きなものに襲われた。

「それ」が襲ってくる直前に一瞬、波が押し寄せてくるような感覚を味わったかもしれない。しかしその正体が分かる前に、シビビ……！と刺激的すぎるものが響子の身体の隅々まで行き渡った。

「ふう……ふう………」

とりあえずは両手を身体から離され、刺激からは解放された。

抜けきらない余韻の中、今のものの正体が分からずにいると、蛇神が答えを教えてくれた。

「おお、初めてで果てたか。今日中に最後まで行けそうじゃのう」

「は、て……」

「そうじゃ。今風に言うたらイク、か？慣れたらもつと気持ちよくなれるぞ」

これが絶頂で、これより上もあるのか……。響子は既にやみつきになって、もう一度さっきの感覚を味わいたくなっていた。

蛇神の指が、再び秘部に当たった。

「まずは指一本からじゃな」

そこがおそらく膣か、なんて考える余裕は、指が侵入を始めた途端無くなった。

「ふぐつ、うぐう……」

強い異物感。これが、ここに何かを挿れる行為が、自然なことだとは思えない。

「痛いかな？」

響子は首を横に振った。

「あっぱくかん、いき、くるし……」

それだけ絞り出すのもやっとだ。痛みこそ無いが、内臓が下から押し上げられているようで、浅い息しかできない。

「そうか……。力抜いて、気持ちいいところに集中せえ」

蛇神は再び胸の蕾を口に含み出した。

「あっ……はっ、はあ……ッ。ッふ……」

気持ちいい。

挿入と同時に甦った恐怖心がほどけるとともに、膣壁もほぐれていつている、気がする。

ある程度ピストンをしても呼吸の苦しさが見られなくなると、蛇神は二本目の指をあてがった。

ずぶ、と入り始めるや否や、痛みと恐れがやってきた。

「いやっ！やだ！やだ！おわる！」

響子の明らかな拒絶反応を見て、蛇神も動きを止めた。

「落ち着け。大丈夫じゃ。さっきもすぐ慣れたじゃろう？」

なだめる言葉も、この恐怖の前には届かない。

これ以上やれば裂けてしまう、本能的にそう感じたのだ。

「やだ抜いてよお……もうおわりがいいです……」

蛇神は眉を下げて、それでもこう言えば頑張れるだろうとばかりに微笑みを浮かべながら説得を続けた。

「卵はどうするんじゃ？お前の故郷は？」

「いらない……もういらないからあ……！」

泣きそうな様子に、このまま進むのは無理だろうと判断したのか、蛇神は指を二本とも抜いた。

ようやく恐怖から逃れた響子は、身を守るように横向きになり、丸まって震えた。

「……悪いがこのまま終わらしてやることはできません」

キツパリとした口調がひどく冷たく感じる。先程の、あやすような声ではない。きつと、響子の意思や都合を汲んでの融通はしてもらえないのだ。

「理由は二つ。お前は自分の意思で、ここに残って卵を産むことに決めた。今日半日この家で過ごし、食事も摂った。もう役目も果たさずに帰してやることはできません。これはわしの意地が悪いのではない。人間の信仰と神の加護、この二つはお互い裏切ることなどできないのじゃ。お前はわしが加護を与える手助けをする決まってしまううたんじゃ。二つ目の理由はな、今やめたらお前の中で、まぐわいは怖いものだと思え付けられてしまう。そしたら次するときにはもっと怖いぞ。いつまで経っても最

後までできんようになる」

そんなことを言われても、既に恐怖に支配されてしまったのだ。生け贄の仕事を頑張ると言ったのも、所詮本心ではない。だから、そんな決意とも言えないものは、簡単に折れてしまう。

ぐずりながら無言の抵抗をする響子に、蛇神がため息を一つ吐いた。

「ほれ、脚ひらけ」

再び響子を仰向けにさせた。

その間も響子はずっと黙り込んでいた。

蛇神の言うことも、理屈では分かる。それでも何かを恨まずにはいられない。

——嘘つき。もう引き返せないなんて聞いていない。

——違う。この人はちゃんと確認してくれた。「生け贄としてここに残る」と言ったのは自分だ。

——だってそれは……。

——また他人のせいにして言い訳して、自分の弱くて悪いところは棚上げするつもり？

自己弁護と自己嫌悪で胸は押し潰されそうなほど苦しく、誰かを……蛇神を悪者にする事で楽になりたくなる。

でもそれができるほど馬鹿でも、自己中心でもない。

「ぐうっ……」

「これは痛くないな？」

蛇神の問いに、こくこくと頷いた。

響子の蜜壺を貫く指は一本。そして目下のところ、増える様子はない。動きもゆっくりで、響子の反応を見ながら、さぐり探りといった感じた。負担は軽くなるようにする、と言ってくれた。そしてそれは単なる気休めではなかったようだ。

——これじゃあ恨めない。こんなに誠実な人を、憎めない。

まだナカでの快楽は上手く得られないが、もう痛くはない。

挿入した瞬間のようなうめき声も上がらなくなったからか、蛇神の指の動きも徐々に速まっていく。

「んっ、うっ……」

気持ちいいとは思えないのに、身体はビクンビクンと跳ねる。漏れる声も、嬌声とはほど遠い。

痛みも快楽を伴っていない、ただただ強すぎる刺激を与えられ、響きは体力も気力もすり減ってゆく。

それでも次第に、ぎゅつと閉じられた瞼の裏、針で開けられた小さな穴から暗闇に差すような、微かな光が見えた気がした。

これがきつと快楽なのだ、と分かった瞬間その光は、線香花火の最期を巻き戻したように、秘部から脳天へと上がっていった。

「んゝゝゝッ、んんゝゝゝゝゝッ♡♡」

頭が全部真っ白にフリーズして、考えていたこと全部取り上げられて空っぽになった。

思考と一緒に身体も、存在自体も霧散していきそうなのが怖くて、シートを掴む。背を仰け反らせて、頭を振り乱す。

「っはあ♡ああ……♡はあ……♡」

暴れた拍子に当たった物に頭を擦り付けると、蛇神の左手だった。そう分かった後も擦り寄るのをやめられない。もうなんでもいいから甘えたくて仕方ない。

蛇神も受け入れてくれているようで、響子の頭を撫でた後は頬を手で包んだ。指の背や爪でくすぐられて、響子は目を細めた。

「上手じゃ。そのまま力抜いとくんじゃぞ」

ズズ……、と二本目が入ってくる感覚があったが、今回は痛くなかった。

「んっ……♡はあ……ん……♡」

下半身に勝手に力が入って、腰がくねる。

そうすると蛇神の指の当たりどころが調整されて、たまらない。

指が動いたたびに、触られているところが熱くなる。

「ああっ♡そこ、だ、めえ……♡きゅーけ、いつかい、きゅーけいい♡」

「そうか、ここか」

また指を増やされ、バラバラと動かされる。

「あん♡♡やあっ♡」

そこも、ここも、きもちいい。

「あーッ！きもちいい、きもちいい♡あっ……？」

せっかく気持ちよくなってきたのに、蛇神は指を抜いた。

「う……？」

疑問と、少しの切なさを込めた目で見ると、蛇神は目を細めた。自分

の着物に手をかけながら言う。

「そう睨むな。そろそろええ頃合いかと思うただけじゃ」

そして現れた肉棒は、太く、長く、そり返っていた。

「あっ……ひイン……♡」

脚を広げられ、受け入れる体勢をとらされても、響子に恐怖心は生まれなかった。

アレで今からどうされてしまうのか……。可愛がられることを想像しても、いじめられることを想像しても、体は疼いて、ナカが急かすように、ひとりでにキュツとなる。

蛇神の剛直が蜜口にあてがわれた。

「あ、あ……♡」

「挿れるぞ……」

ゆっくりと挿入が始まった。

「いやああああ♡あああッ♡」

指よりも太く、硬いソレは、響子の脳内をいとも簡単に塗り替えていく。もう一面が真っ白で、快楽のことしか考えられない。

「おお、すっかり受け入れる準備が出来ちよるわ」

響子が悦んでいるのを確認して、蛇神は腰を動かし始めた。

「あああああっ♡うああん♡」

段差でカリカリ引っかかるのが気持ちよくて、だらしなく開けっばなしになった口から甘い声が出てくる。

その上、突かれるたびに指では届かなかったところまで暴かれる。押

し広げられる感覚は、後戻りできなくなる恐怖を連れてきたが、響子の脳はそれすらも背徳的な快感として受け取ってしまう。

「おくっ♡おくがぁ♡♡」

「そうか、お前は奥が好きか」

深いところで小刻みなピストンをされると、瞼の裏がチカチカと明滅した。

アレが近づいてくる……。

「うぐ、イグう……ッ♡」

しがみついて絶頂の予感を伝えると、蛇神はストロークを少し長めに戻した。

「わしもそろそろじゃ。出すぞ……っ。ええな？」

返事をする前に、肉茎が痙攣する。

「つく……」

どぴゅつ、どぴゅつとリズムミカルな射精に、とどめを刺された。

「んあああゝッ♡♡あちゅいのおお♡♡」

頭も、きつとお腹の中も真っ白。身を振ろうと背をのけ反らせようと、この熱からは逃げられない。お腹の中に焦げ目を付けられたような感覚に陥る。

「よう頑張った。抜くけん最後、あとひと頑張りじゃぞ」

そう言うのと蛇神はペニスをゆっくり引き抜く。

「ひうっ……!？」

きつく締まった膣壁が、肉棒と一緒に持っていかれそうになる。

挿入時のみならず取り出す時もこんな、辛さと快感の入り混じるたまらない気持ちにさせられるのかと驚いたが、幸い今回はすぐに終わった。

（これで、終わり……？役目果たせた……？）

ずっと強張っていた身体も力が抜け、安堵の気持ちになるとともに睡眠魔が襲ってくる。

（このまま寝ちゃっていいのかな……？なんか、後始末が必要とか聞いたことあるけど……）

しかし酷使した身体も精神も眠気には敵わず、響子はそのまま眠りに落ちた。